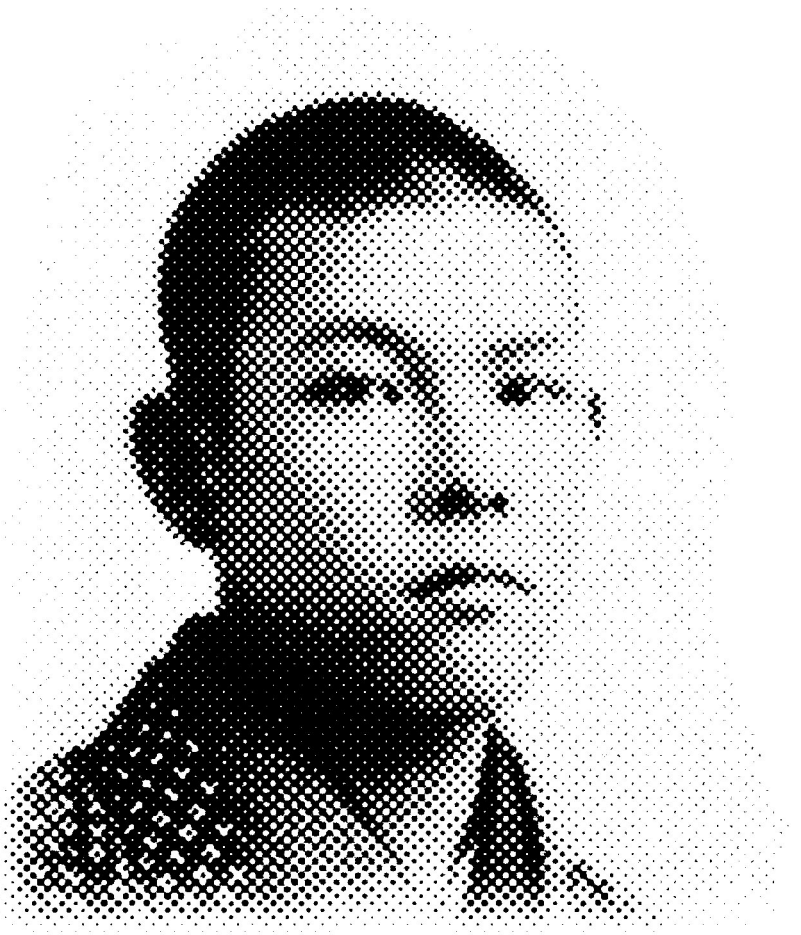
古川 竜

＝その不屈の生涯＝



はじめに …… 1
Ⅰ　古川苞の生い立ち …… 4
Ⅱ　社会思潮への目覚め―山形社会思想研究会 …… 6
Ⅲ　東大入学とセツルメント活動 …… 9
Ⅳ　逮捕・投獄にひるまず社会変革運動へ献身 …… 12
　一　最初の試練―一回目の逮捕 …… 13
　二　四・一六事件で再検挙、地下活動に入る …… 14
　三　「二月事件」で三度目の検挙―刑務所でハンスト、仮病で仮釈放、再び地下活動へ …… 15
Ⅴ　「蛎男（かきおとこ）」のハンスト―四度目の検挙 …… 22
Ⅵ　瀕死の床にあって …… 26
Ⅶ　いまふたたび―新資料発掘に寄せて …… 29
　一　剥がされた一枚の写真 …… 29
　二　「エミールを読め！」―獄中書簡「はがき」の発見 …… 30
　三　「この人を見よ」―名声を求めなかったその生き方 …… 34
　四　青砥・亀有無産者診療所運動と古川 …… 40
おわりに …… 45
略年譜 …… 46

本稿は、2006年3月15日に開催された「古川苞を偲び不屈のたたかいに連帯する夕べ」での藤田廣登氏の記念講演に、その後の研究成果を反映し加筆したものです。

はじめに

いまから八〇年前の一九二八（昭和三）年三月十五日未明、一道三府二七県において特高警察による全国一斉の弾圧が行われました。この日、共産党員を中心に日本全国で一六〇〇人にのぼる労働運動の活動家が治安維持法によって検挙され、野蛮な拷問が加えられました。

この日、東京江東区の小松川警察署関係での検挙者リストの七人の中に古川苞（しげる）という二二歳の東大生の氏名が島上善五郎（戦後、社会党代議士）などとともに特高文書に記載されています。この古川という無名の青年がなぜ検挙者リストに載せられていたのでしょうか。

本稿は、この青年が戦前、天皇絶対の暗黒専制時代に主に東京東部地域で活動をつづけ、何度も捕らえられながら節を曲げずたたかいつづけ斃れて逝った二九年の短い生涯に光をあてるものです。古川苞の生涯については故山岸一章氏の先行研究『不屈の青春』（新日本出版社）の一節に「不屈の共産党員古川苞の生涯―自己犠牲を貫いた青春」があります。この本は今日では入手が困難ですので、その研究を基本にしつつその後の研究の成果を補強して記述していくこととします。

その時代　いったい、この時期にまだ大学生であった古川青年が、なぜこの地域で活動をはじめていたのでしょうか。それを解くカギは当時の社会状況にあります。まず、古川が活動を始めた当時の時代背景を年表で大まかにつかんでいくこととします。

一九一四（大正三）年　第一次世界大戦勃発
一九一七（大正六）年　ロシア社会主義革命　その激動が日本に波及

一九一八年　米騒動全国に波及、労働運動の高揚
一九二二（大正一一）年　日本共産党創立
一九二三年　関東大震災　亀戸虐殺事件
一九二五（大正一四）年　治安維持法、普通選挙法成立
一九二七（昭和二）年　日本共産党、「二七年テーゼ」による活動開始
一九二八（昭和三）年　二月二〇日　第一回男子普通選挙　労農党躍進、山本宣治ら当選、共産党のビラが公然とまかれる

この選挙でこの東部地域をまとめた東京四区から立候補した唐沢清八[*1]が本所・深川に選挙事務所をおいて古川青年と共にたたかった谷川巌[*2]氏はその時の状況を次にように書いています。「本所公会堂で開かれた大演説会が官憲によって解散が命じられ……その時暗闇から沢山のビラがまかれた。すかして見ると「日本共産党」という活字が目に飛び込んできた。その一枚を素早く靴下の下へかくして大急ぎで下宿へかえって読んだ。『天皇制打倒』『帝国主義戦争反対』『米と職をよこせ』『労働者・農民の政府樹立』という活字を何度も読み返した。日本にも『共産党』ができているのだ！と、その夜は興奮して眠れなかった」（『『龍舌蘭の花』）と。

この興奮は、同じ選挙戦をたたかっていた古川青年にも共通するものであったでしょう。人民の前に日本共産党が公然とその存在をアピールして、しかも労働農民党（労農党）から一一人もの共産党員が全国各地で立候補して善戦したのです。無産政党は得票率四・七％、四七万票余を獲得し、労農党は一九万票とそのトップを占めたのです。小林多喜二の『東倶知安行』

は、この時、東京からの移入候補・山本懸藏の奮戦振りを、自らの銀行員の身分を隠して選挙応援を行った初体験をもとに書き上げられたものです。一九二二年に日本共産党が創立され、直後に弾圧によって押さえ込んだと思われていた共産党がこの選挙戦を通じて再び勢いを増して大きな影響力を持ち始めていたことを知った支配階級は総選挙直後の三月一五日を狙って一斉弾圧にのりだしたのです。古川青年もこの渦中に巻き込まれたのです。

＊1唐沢清八　一八九四年二月三日～一九六六年七月一〇日　長野県高森町出身。上京後南葛労働会に加盟、一九二八年二月の第一回普通選挙に労農党から東京四区で立候補。戦後共産党東京都委員長

＊2谷川巌　一九〇六年三月大阪生まれ。東大法学部政治学科卒。新人会員を経て戦前、無産者新聞、日本反帝同盟書記局、反帝同盟執行委員の多喜二との連絡係り。逮捕投獄をうける。戦後私鉄総連常任書記。労働者教育協会常任理事として講師活動。一九八九年没。著書に『日本労働運動史』『龍舌蘭の花―明治・大正・昭和を生きて』

Ⅰ　古川苞の生い立ち

古川苞は、一九〇六（明治三九）年七月二八日、小樽で父松柏、母よしさんの長男として生まれました。八歳上に姉の貞子さん、三歳下に妹の庸子（つねこ）の三人きょうだいでした。父の松柏さんは鳥取県岩見郡岩井村（現鳥取市）出身で、母よし（普段は芳子と呼称）さんは兵庫県の日本海側の浜坂町（現新温泉町）出身です。本籍は鳥取市江崎町一二番地です。父松柏さんは農商務省下に置かれた水産講習所（現水産大学）の一期生で鳥取県庁勤務のあと鮭の人口孵化の研究でアメリカ留学から帰国したあと小樽の水産試験所所長として仕事をしていました。

転校の度ごとに　松柏さんはその後、山形県庁、青森県庁、宮崎県庁などを歴任、良心的な開明の考えをもつ公務員で教育熱心な人でした。その後いったん東京に戻り古川は文京区小石川礫川（れきせん）小学校五年生に、ついで五年生の秋から六年生にかけて港区白金小学校に

〔山形中学校時代〕前列左から苞（14、15歳頃）、姉貞子、一人おいて右端・母芳子、後列左・鈴木武夫（貞子夫）、右・父松柏

在学します。白金小学校は比較的上流階級の子弟で秀才が多かったのですが途中入学の古川はたちまち成績一番になりました。そして担任の奈良島先生の講義に異議をとなえやりこめるほどでした。それは江戸幕府の伊井大老を評価する先生に対して、吉田松陰弾圧などを批判して食い下がったということです。古川は学業で秀でていただけではありません。先生からも愛され、何よりも級友たちの信頼と尊敬を集め、転校したばかりなのにみんなに推されて級長に選ばれました。

古川苞３歳の頃

〔古川苞９歳の頃〕前列左から母芳子、妹庸子、祖母、苞、姉貞子、後列左・父松柏

Ⅱ　社会思潮への目覚め—山形社会思想研究会

その古川少年に転機が訪れます。六年生の時の十一月、父の転勤で山形男子附属小学校へ転校、翌、一九一九（大正八）年、山形中学に入学、そこでも二学期に級長に選ばれます。級友たちは、異口同音に、ガリ勉をしないのに成績がよく、教科書以外の本を実によく読んでいて、博識・見識の高いことでずば抜けていた、と証言しています。そして一メートル以上もの積雪の中、厳冬期にも足袋もはかず制服の下は夏シャツ一枚で通していたのです。この体験は後に古川が四回にわたる獄中生活やハンストなどに耐えうる肉体と精神力を作り上げて行くことにつながりました。こうしてクラスの秀才たちにもバンカラ族にも一目おかれる古川の学校生活ぶりが浮かび上がります。その彼が「新入生歓迎会」で四年生を代表して「来るべきもの」という演説をしています。その中で彼は、民族的争闘、黒人の虐待史、人種差別の撤廃、階級の平等などの堂々の論旨で会場をうならせたというのです。彼が単に博識ではなく、世界全般に広い視野を持ちはじめていたことを示すものです。このことはまた、彼がいかに人望を得ていたかの証左です。彼が行く先々でその地に溶け込み、人望を集めていく姿、困難にめげず突き進む姿勢はその後、彼の社会変革運動の中でも限りなく発揮されていく、その片鱗がうかがえます。

山形高校・社会思想研究会　古川は一九二三年　旧制の山形高校に合格します。現在の山形大学です。山形大学には、古川の学籍簿が残されています。それによると

1　大正一五年三月、山形高校卒業　明治三九年七月二八日生まれ
2　山形県立山形中学４年修了
3　住所　山形市旅篭町５７８
4　原籍　鳥取市江崎町１２
5　父　古川松柏
6　席次　８番

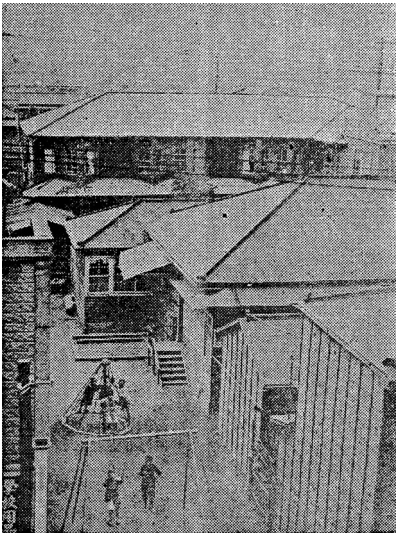
古川が山形高校に入学した年は日本共産党創立の翌年であり、共産青年同盟が結成され活動を開始した年でありその潮流が次第に地方にも波及しはじめる年でした。一方で関東大震災の混乱にまぎれて渡辺政之輔が指導する南葛労働会、平澤計七の指導する純労働者組合活動家の虐殺事件があり世相は騒然としていました。

当時、すでに一九二二年には学生運動の全国組織「学生連合会」が結成され、古川が入学した翌年の一九二四年に「学生社会科学連合会」（学連）が結成され全国に影響力を及しはじめていました。山形高校では同期生の亀井勝一郎とで「山形社会思想研究会」がつくられ活動をはじめました。古川はここで初めて社会科学理論の洗礼をうけます。こうして彼の真摯な学問の追求が科学的真理の追求に発展していったのです。当時、学生、青年の中ではクロポトキンや大杉栄らの無政府主義的な思想の影響が強く、「汝は富める者の走狗として一生を送るか、それとも貧しき者、虐げられし者の友として牢獄に死ぬか」という社会思潮や命題が突きつけ

られていました。入学した翌年に、古川らによって山形高校内につくられた「社会思想研究会」の活動内容などは十分には解明されていませんが、古川の思想的転換点・飛躍がこの時期に形成されたことは間違いなく、それを裏づける今後の研究の進展が望まれます。級友たちの回想によると、古川はすでにこの時期にマルクスの『哲学の貧困』をはじめマルクス、エンゲルス、レーニンなどの文献を熱心に読み学習していました。その証言によって彼がこの時点で科学的社会主義理論を学びそれによって科学的社会主義の立場に急速に接近したとみて間違いありません。それが次の東大新人会時代へと連続する飛躍につながっていくのです。

Ⅲ　東大入学とセツルメント活動

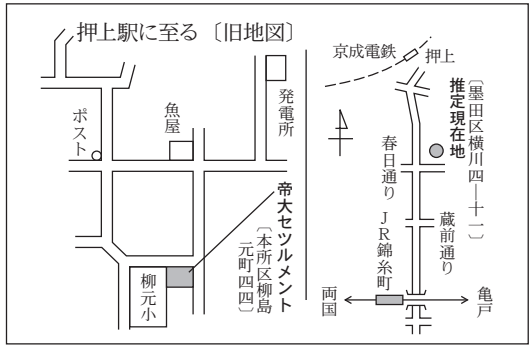
セツルメント活動　一九二六（昭和元）年、古川苞は亀井勝一郎とともに東京帝国大学に合格し、文学部社会学科に入学します。そして、「山形社会思想研究会」活動の帰結として、二人とも当時、東大学生の中でもっとも進歩的な組織といわれた「東大新人会」に加入します。古川は六月に大学内で開かれたセツルメント講演会に参加して会員になりました。亀井がもっぱら新人会活動を選んだのに対して古川は本所の柳島元町につくられていた「東京帝国大学セツルメント」[*3]活動に参加する方向を選択しました。このときすでに二人のその後の人生の分岐点が生まれていました。


当時の東大柳島セツルメント全景

東京の貧困者層の多かった下町に居をかまえたセツルメント活動は、診療所、託児所とともに、勤労者の啓蒙活動にも力をいれていました。このセツルメントでは、当時、労働者に社会科学を教える「労働学校」が人気が高かったが、古川は率先して「市民学校」という目立たない地味な活動分野を選択しました。こうして彼は市民教育部に所属し中等課の講師をひきうけました。当時の工場労働者は小学卒が多く、中等教育の機会がなかったので好評で次第に生徒

が増えていきました。

東京モスリン亀戸工場ストライキと古川　その生徒の中に古川を生涯の師と仰いで活動した伊藤憲一[*4]がいます。一九二六（大正一五）年七月、東京モスリン亀戸工場で総同盟指導のストライキが発生します。ことの起こりは、夕食のおかずに出されたささげの胡麻あえから五〇〇人余の女工を中心にして集団中毒が発生しました。その原因を否定する会社側に対して三千数百人の労働者がストライキに入ったのです。伊藤は名もない職工たちが堂々と演説するのを聞いて自らも勉強しなくてはと発奮します。総同盟の幹部はストライキ中に警察署長を呼んで穏便にするように訓示させたり、幹部が買収されて「解決」してしまうのを見ていました。この争議が終わるとすぐに帝大セツルメントの学生たちが工場門前で市民学校と労働学校の入学案内と勧誘のビラまきにきました。伊藤は月五〇銭の月謝と教科書も要らないというのですぐに訪ねて行き労働学校に入りたかったが、小僧のくせに生意気だという工場内の評判をおもんばかって市民学校に入学したのです。ここで講師の古川に出会い、彼から唯物史観の講義を受け、その影響を受けて思想的に成長したのです。そして東京合同労組、全日本無産者青年同盟に加盟し「無産者新聞」『インターナショナル』『産業労働時報』などを読むようになったと回想し（『牢獄の青春』一九四八年）、同時に「彼はほかの大学生のようにおしゃべりせず、生活が実に几帳面でまじめ、まるで聖人のような生活態度で、



当時の東大柳島セツルメントの場所

冗談などいわなかったが、人を引き入れる魅力があった。無口の彼が木琴をたたくように笑うと回りが明るくなった」（「新しい世界」一九四八年一月号「この人を見よ」）と回想しています。

このように古川の生活態度は、そこでの彼の几帳面で真面目な講義態度や人を引きつける話し振り、社会人生徒に冗談をいって笑わせ、自らも木琴を引くように笑い、そのために教室中がいつも明るい雰囲気だったと、後に優れた活動家となった多くの受講生が回想しています。講義は国語が中心だったが、講義の終りにはちゃんとオチがあって「戦争はなぜ起こるか」というような質問をだし、帝国主義戦争の本質を説いたりしていたのです。また、彼から「唯物弁証法」の講義を聞いた、という人も多くいます。当時の古川は、無口で担当した仕事を黙々とこなすという目立たない青年で、引き受けたことは石にかじりついてもやりとげるという強固な意志を秘めていて、まわりからの信頼を集めていました。学生の間でも信頼があつく、苞という字がホウ、つつむという意味があり、そこから連想して「コモさん」という愛称で呼ばれていました。

＊3東京帝大セツルメント　日本では片山潜が神田キングスレー館で一八九七年に開いたのを嚆矢とする。主にインテリゲンチャが労働者や貧困者の密集する地域に入り施設をつくって啓蒙と救済活動を行う組織の総称。東大セツルメントは関東大震災の翌年の一九二四年に現在の墨田区横川四丁目十一番地付近に開設した。一階に診療所と待合室、消費組合店舗、託児所、図書室、講堂、食堂があり二階には図書室、調査室、教室、法律相談室、学生たちの宿泊室を設置していた。一九三八年弾圧で解散に追い込まれた。建物写真と概略図参照。

＊4伊藤憲一　一九一二年一月二五日～一九八一年一〇月一七日　東京モスリン亀戸工場勤務、一九二六年のストに参加。九月帝大セツルメント市民学校入学、史的唯物論、マルクス経済学を学ぶ。同工場の飯島喜美などの活動家を育てた。戦後、日本共産党衆議院議員、都議会議員、大田区議会議員歴任

Ⅳ　逮捕・投獄にひるまず社会変革運動へ献身

こうした活動を見込まれ、翌一九二七年、労農党の江東支部が結成されるや、その書記となって活動をはじめます。そして一九二八年二月、最初の男子普通選挙をたたかいます。亀戸のバラックに労農党の四区候補、長野県下伊那の労働者出身の唐沢清八の選挙事務所を設け選挙戦をたたかう先頭にたちます。

「赤旗（せっき）」との出会い　冒頭引用した谷川巌は、労農党本部から派遣されてともにたたかったのです。古川はここではじめて、この年の二月一日に創刊されたばかりの「赤旗」に遭遇するのです。そしてむさぼるように読んだのです。こうして古川は、小数の秘密結社であったと思われていた日本共産党が、公然と人民の前に姿を現わして活動を開始した初期の段階に共産党に遭遇し、日本にも「共産党があるんだ！」この驚きと感動が、すでにマルクス主義を理論的に吸収していた古川を捉えたのです。古川は大きな飛躍の時期を迎えたのです。当時の古川は、学生生活[*5]とセツルメントの市民学校講師、そして労農党支部の活動の三つをこなす生活でした。

＊5　古川苞の卒業年次については、一九二九説（『東京帝大新人会員の足跡』）と一九三〇年説（『東京帝大新人会員の記録』）がある。本書年表では一九二九年を記載。

一　最初の試練――一回目の逮捕

一九二八年三月十五日　こうした粘り強い勉学と活動を通じて古川は一九二八年の三月十五日の朝を迎えたのです。冒頭でふれたようにこの日、労農党江東支部に寝泊まりしていた古川は特高警察に襲われ、そのまま小松川署に連行されました。しかし、古川が学生でありブラックリストに載っていなかったため二九日間の勾留で釈放されます。

彼はこの最初の弾圧にひるむことなく、釈放後、江戸川区小松川にあった渡辺政之輔らのつくった東京合同労組南葛支部書記の仕事を引き受けます。この時には、すでに労働組合評議会が強制的に解散させられた後で、階級的な南葛労働会の流れをくむこの活動に参加することは再度の弾圧の中に飛び込むことは必至でした。それでも彼はためらうことなく任務を引き受けます。

共産党への入党　こうした活動で確信をもった古川は、党のすすめに応じて率先して日本共産党に入党します。一九二九年二月のことでした。この時、治安維持法はすでに前年の六月、天皇の緊急勅令によって最高刑が死刑にひきあげられ、また「目的遂行罪」により特高がこの集会やビラまきや言動は、共産主義運動を助ける行為だと勝手に判断すれば誰でも検挙できる仕組みを上乗せしたのです。この時期以降の検挙者の圧倒的部分はこの「目的遂行罪」の適用でした。こうした時期に古川苞が共産党入党に踏み切るのには堅い決意と勇気が必要でした。

二　四・一六事件で再検挙、地下活動に入る

特高警察は、前年の三月一五日の一斉検挙で共産党に壊滅的な打撃を与えたと豪語していたが、その後も全国で古川のように率先して共産党に入党する青年が相次ぎ、たちまち大きな勢力に発展してきました。こうした動きを止めようとして翌年、再び全国一斉の大規模弾圧が加えられ、全国で一〇〇〇人余の活動家が検挙されたのです。「四・一六事件」と呼ばれる弾圧事件です。この時古川は、江戸川区平井に下宿しており、小松川署に四〇日間ほど留置され、拷問と虐待がつづけられ心臓脚気が悪化したため釈放されセツルメントの医務室に入院後、両親の待つ山形に帰って療養します。そして、その年の秋、両親をともなって上京、葛飾区・高砂の借家に一家そろって住んだのです。両親は、この時はまだ息子の活動に反対しており、上京同居は活動を再開させないよう息子を見守るためのものだったのでしょう。

しかし、古川は健康を回復するや直ちに共産党中央部の秘密印刷所の任務につきます。彼がすぐれた達筆筆耕（ガリ切り）プリンターだったからです。当時の印刷は、ガリ版と称して、ロウ原紙をヤスリの上に置き、鉄筆で筆耕したものを謄写機で印刷するもので、筆耕原紙の良否が印刷枚数を規定したのです。かれは地下印刷所で昼夜を惜しんで印刷活動に参加していたのです。当時の活動内容は明らかではありませんが「赤旗」の印刷、発行に従事していた可能性があります。

「彼はじつにスグレたプリンターであった。ものすごい達筆家だったが、かれの切ったビラは、かれの性格のように、だまっていて、しかも、これをよめ！　とつよくよびかける精神の

躍動しているビラであった。かれはモクモクとして、じつによくビラの原紙を切った。……それで方々の機関でひっぱりだこになり」と前出の伊藤憲一は回想しています。

三　「二月事件」で三度目の検挙―刑務所でハンスト、仮病で仮釈放、再び地下活動へ

この活動の途上、一九三〇年「二月事件」と呼ばれる、共産党への資金提供の疑いをうけた事件で三度目の検挙を受けます。二月二三日のことです。そして豊多摩刑務所（現中野区、戦

起訴された被告　百七十三名

内日本共産党員五十七名、日本共産青年同盟四十四名、其他七十二名

日本労働組合書記　川崎堅雄　28
無職　古川　苞　25
バリカン製作工　山本友久　25

同　同
著述業　中野重治
無職　佐野英彦
同　同
著述業　小林多喜二　28
無職　立花　波次　33
同　竜上　三郎　26

同　同
弓削　蕎雄

後廃所）に収監されます。

この年、多喜二は小樽から上京し作家同盟の活動に参加、発禁処分のつづく『戦旗』防衛の資金集めのための関西講演旅行先で同事件容疑で検束されます。当時の「大阪毎日新聞」号外（昭和六年五月二十日号）に起訴された一七三人の中に多喜二も古川も氏名が登場します。

獄中でハンストつづける古川　その後古川は一九三二年に豊多摩刑務所から市ヶ谷刑務所に移動します。ところがその一年後の一九三三年春になって、妹の庸子さんに裁判所から呼び出しがあり駆けつけると、「市ケ谷刑務所に入獄中の兄がハンストをやっている、このままほっておくと命にかかわる、なんとかハンストを中止するよう説得してくれ」と頼まれたのです。驚いて市ケ谷刑務所の病室に駆けつけると検事のいうように古川は白ロウ色の顔でベットに横たわっていたのです。ハンストを止めるよう懇願する妹に古川は「ぼくはハンストをやっているのではなく、どうしても食事がとれないのだ、病気なのだといい、ベットのちかくにいた私の手を、フトンのなかにひきずりこみました。……兄はなにか私の手のうちに指で字をかきはじめました。わたしもそれに気がつきましたので全神経を手の平に集中してその意味をわかろうと努力しました。……わたしが手の平で受けとめた意味は、ある大切な要件のために、どうしても出獄しなければならないからよろしくたのむとゆうのでした」（「新しい世界」一九四八年一月号「兄のおもいで」）。

衰弱状態のひどさに驚いた庸子さんから依頼をうけた弁護団の尽力で、古川は執行停止となり慶応病院に入院、三日後には特高警察の見張りのつく自宅へ連れ帰りました。こうして四月八日、執行停止でシャバへ出た古川は、暫く自宅で体力をつけていました。この時、亀有無産

者診療所から治療に通ったのは渡辺宗治医師です。仮釈放ですから特高警察の監視下におかれ体力が回復すればまた刑務所へ逆戻りです。しかし自室で寝たきりの生活だった古川は夜になると歩く訓練を始めていましたから、両親は彼の脱出の気配を察していたようです。こうして三週間たったある日、両親を外出するように仕向け、ふらつく足で特高警察の監視をくぐり抜け、妹庸子の見送りを受け高砂駅から姿を消しました。一九三三年五月のことでした。その時、ヤセこけた古川の洋服を仕立てたのは山本喜三郎という協力者でした。彼は太った古川を想定して仕立てたということですから、その背広はダブダブでした。特高警察はまんまと欺かれたのです。

家族ぐるみの協力を受けて　両親は息子の動作からその気配をつかんでいましたが、活動をとめることはしませんでした。それだけでなく父親の松柏さんは、古川の入獄中の一九三〇年秋、亀有無産者診療所の前身である青砥無産者診療所の設立費二〇〇円を寄附しています（この年『不在地主』を書いたため重役の激怒を買いクビとなったエリート行員の多喜二の本俸は一〇〇円。一般労働者はその半分くらいの時でした）。松柏さんは、その後も「赤色救援会」（今日の日本国民救援会の前身）の資料発行費として一五〇円を拠出しています。

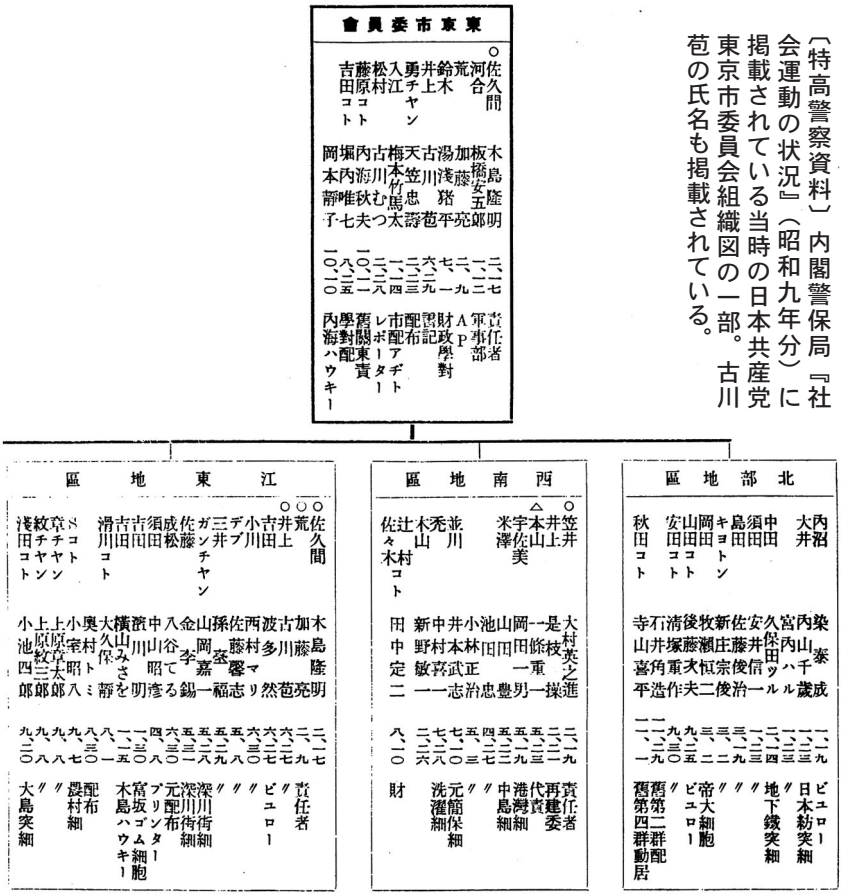
この頃には弾圧犠牲者家族会にも出席、蔵原惟人の父、惟郭（これひろ）氏とも親交を結んでいます。古川の真面目な偽りない献身の姿を見て、家族ぐるみでその活動を支援するようになります。妹の庸子さんも消費組合活動に参加し二回（千葉刑務所・市ヶ谷刑務所）にわたって検挙されています。

この自宅からの「脱出」のとき、古川は両親の有り金をもって出ています。しかし後日、そ

の大部分を送り返しています。自らの活動の資金は回りの協力者から受けられる目処がついたのです。ここにも古川の真面目な、家族を裏切らない姿勢がみられます。

特高警察の追跡かわし東京中を走り回る　さて脱出した古川の主な任務は、殆どが検挙されてしまった共産党東京市委員会の再建と当時党内に潜り込んだスパイ挑発者とのたたかいを通じて野呂栄太郎、宮本顕治検挙後、唯一残って活動していた袴田里見中央委員を守り党の統一的指導の続行、財政難と配布網を断ち

〔特高警察資料〕内閣警保局『社会運動の状況』（昭和九年分）に掲載されている当時の日本共産党東京市委員会組織図の一部。古川苞の氏名も掲載されている。



切られた「赤旗」の再刊に協力することでした。特高警察は、最後の中央委員・袴田を捉えるために、まず、その居場所を知る古川苞と谷川巌の追跡にかかります。それをかわして古川は東京中を走り回ります。

古川を支えた群像　こうした活動を支えたのは、東京東部地域の活動家たちです。古川が全く収入もないのに飢えずに東京中を走り回れたのは、彼を支える強固な活動家群があったからです。この時代、彼を匿ったと判れば間違いなくブタ箱行きです。古川は、活動資金と「赤旗」の発行費用を生み出すために「大根の葉っぱをきざんで塩もみして朝食とし、夜はその身を食べる」ような生活に耐え、「おばさん、おとといから何もたべていないんだよ」といって協力者宅に人なつこい顔を出して食事をさせてもらい、それでも協力者の家族のためにオカズを残してまた次の活動に入って行ったというのです。

ある時は農家の納屋に匿ってもらい、ある時は会議場所を失った袴田中央グループのために二葉平氏の知合いの漁師の釣り餌とりの「ショウさん」の家を借ります。袴田が会議をした江戸川区砂町のこの場所はドブ水の浸かるミミズが床上にあがってくるような部屋でした。山岸氏の文章では「無産者新聞」支局長を歴任の双葉平となっていますが、正確には二葉平です。その長女・花沢楓（取手市在住）さんと連絡がとれ、二葉氏が生前以上のように漏らしていたことが判明しました。おそらく古川の生活も似たり寄ったりだったでしょう。そうした生活にもかかわらず理論学習を怠らず同志たちの間では笑顔を絶やさず励ましました。こうした古川の献身的活動が東部地域の活動家群に抜きがたい影響力と信頼関係を持続しえた理由はここにあったのです。

チャリンコの機動力生かして　さらに、古川が東京東部地域はもちろん、東京中を移動するのに用いたのはなんと中古の自転車だったのです。彼は、特高の拷問と虐待、長い刑務所の劣悪な条件、何度ものハンストで衰えた体力でありながら、この「機動力」を生かして走り回ったのです。これで一日七、八〇銭の交通費を浮かしていたのです。彼の足跡は、今日判っているだけでも葛飾、足立、江東、江戸川、墨田などを中心にして青山、新宿、遠くは千葉におよんでいます。路地から畦道へ、裏道から都心へ、街頭と駅で網を張る特高警察の追及をかわして、スイスイと（いや実際にはギコギコと）走り回ることのできたのは、平井の洋服屋・井上熛（さかり）さんが与えた中古の一台の自転車でした。井上さん夫妻は、商売上のミシンをもって転々と住居を替えて古川の生活を支え活動資金を提供しつづけました。

真面目な生活態度と信頼　これまで見たように、古川は無口で不言実行型の青年でした。当時、学生や活動家の中には堕落した生活をする者がでました。獄中で変節した三田村四郎などは料亭で検挙され、伊藤千代子の夫であった同じ東大新人会員・浅野晃などは、千代子が三・一五事件で逮捕された直後に不安をまぎらわすために待合（まちあい）に上がり、そのことを恥じない男でした（浅野晃著『英雄色を好む』）。

古川の真面目な苦労をいとわない活動は真に活動家を励まし、そのことがまた古川の信頼につながったのです。特高警察の残虐な攻撃で、共産党が大きな打撃をうけた一九三四年以降、この時すでに多喜二や野呂が虐殺されたあとで党の旗を守るこの道をいくことは、自らも同じ運命にあることは明らかでした。しかも、中央指導部は袴田のみとなる中で東京市委員会の実質的な責任者としての活動の帰結はあきらかでした。いきおい彼への特高の追及は熾烈を極め

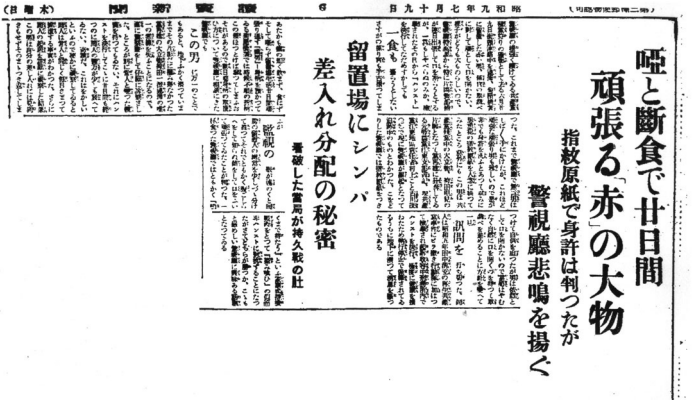
ていました。にもかかわらず古川が党の旗を守り抜き活動を続けられた秘密はそこにあったのです。

学習と経営支部建設　古川は野呂栄太郎が虐殺された頃、井上さんから野呂の『日本資本主義発達史』を借りてむさぼるように学習しています。そして、京成電鉄の職場に党細胞（現在の支部組織）を組織しようとして努力をつづけています。

V 「蛎男（かきおとこ）」のハンスト―四度目の検挙

一九三四年年六月二九日、古川は自転車に乗って移動中、江東区大島で検挙されました。この地域で時計店を経営し古川の生活と活動を支えていた田村良吉氏が、古川が落ち着いて学習したり書き物ができる部屋をさがしていて、ある牧場に下宿する小暮藤三の家に案内する途上でした。彼の活動分野であったモップル（解放運動犠牲者救援会）にもぐりこんだスパイの手引きであったと云われています。

その後の古川の消息は絶えていました。ところが昭和九（一九三四）年七月一九日付けの「読売新聞」が「唖と断食で廿日間（はつか）　頑張る「赤」の大物　警視庁悲鳴を揚ぐ」三段の大見出しつきの記事を掲載します。その記事は。なんと菊屋橋署（墨田区）で完全黙秘、ハンストで頑張り続ける古川苞についての警察署、警視庁特高課の攻防戦の模様が紹介されているものでした。黙秘とハンストを続ける男が「共産党残党中の大立物、袴田里見の片腕となって党再建に狂奔している共産党江東地区村上こと古川茂（ママ）で現に警視庁が躍起に



昭和九年七月十九日　6　讀賣新聞　（木曜日）

唖と断食で廿日間
頑張る「赤」の大物
指紋原紙で身許は判つたが
警視廳悲鳴を揚ぐ

留置場にシンバ
差入れ分配の秘密
暴露した當局が神久敷の吐

「蛎男」ハンストと報じる「読売新聞」（1934.7.19 付）

なって追跡中のものとわかった」というものです。さらにハンストの秘密は留置場のシンパから監視の隙を狙って食べ物を手に入れているというのです。留置場ですからシンパなどいるわけはなく、一般の勾留者のあつい信頼がなければ出来ないことです。

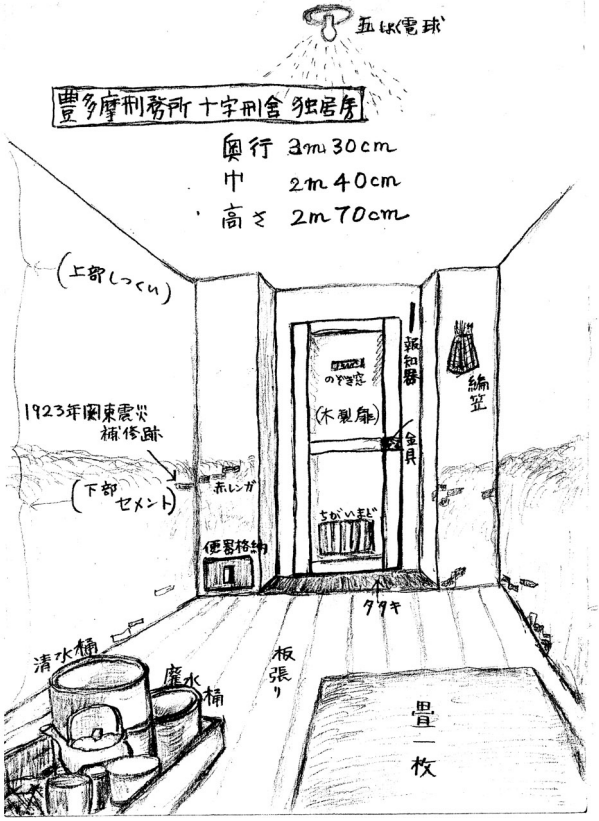
こうして家族や同志たちは古川の消息を知ったのです。このハンスト攻防はその後もつづきなんと六〇日間に及ぶものとなりました。そして夏も終わりに近づいたころ平野署（江東区・現深川署）の呼び出しを受けた庸子さんは、ヒョロヒョロになって骨と皮ばかりになった兄と面会しました。そのとき、古川は①党のことを一言も喋らない、②病院にすぐ入院させることを条件にハンストを終えたこと、他の同志たちによろしく伝えてくれと言い残しています。

拷問と虐待、転向の強要の中で　この攻防は、古川が党と袴田の居場所を一言も喋らずに勝負がつきました。こうして古川は、東京市外豊多摩刑務所に収監されます。古川はここでも頑強に口を割らず、節を曲げずに頑張り通しました。彼の獄中生活は、まだ十分に明らかではありません。しかし、当時、共産主義者と活動家たちが受けた拷問と虐待、思想転向の強要の実態は明々白々です。

警察署・留置場のモデルケース　殴る、蹴る、髪の毛を引っ張る、指の間にエンピツをはさみねじまわす。これは検挙者の殆どが経験しています。しかしこれは序の口、口を割らず一寸でも抵抗すると天井から逆さづり、失神するまで竹刀で殴る、失神すると水をかけて蘇生させる。タバコの火を陰毛に押し付ける、バケツの水を無理矢理飲ませる、これらは特高警察の拷問の常套手段。彼らは天皇の名前出して「おまえらの一人や二人殺してもいいんだ」とうそぶくのも常套句。女性の場合は、これに性的虐待が加えられました。女性への凌辱の模様は息を

のみ涙無しには聞けません。戦前、東京地下鉄のモグラ争議をたたかった松崎濱子さんは、今年九五歳。二〇〇六年河野洋平衆議院議長に会い自らの体験として、この恐怖の暴力により「自白」と転向を迫られたことを涙を流しながら赤裸に語りました。

刑務所での虐待　こうして、起訴されると刑務所送りです。せんべいぶとん一枚の独房の生活です。麦飯、顔がオワンに写るような味噌汁……。口ごたえ、反抗するものには懲罰で食事も運動時間も与えられません。これは古川が拘留された当時の豊多摩刑務所の独房図です。同じ時期に拘留されていた佐野英彦氏（戦前上智大社研、全協活動で逮捕され多喜二と同時期に豊多摩刑務所に収監されていた）が生前、私の伊藤千代子獄中生活の研究のために描き残してくれたものです。抵抗すれば食事も、運動時間も与えられません。それでも古川はシャバの活動中よりここの食事の方が



当時の豊多摩刑務所独居房の見取り図

ましだ、といっています。冬も暖房などありません。水桶に氷が張り、夏は蒸しぶろのよう、風呂は浴槽のなかを歩いて向こう側へあがるだけ、それも週一回程度。多くの活動家が健康を害し、まず、栄養失調におちいり心臓脚気に、ついで結核に感染、拘禁精神病に追い込まれていきます。しかし、満足な治療を受けることができず命を落とすものが相次ぎました。

思想検事・予審判事の転向の強要　ついで、思想検事、予審判事らによる峻烈（しゅんれつ）な取り調べ、転向の強要、さらには肉親、親戚らによる「転向」の懇願がつづきます。獄中にいて孤立無援のもとで密室の攻撃にたえて行かねばなりません。こうした中で、節を曲げずに頑張ることの如何に大変なことか、ましてや、古川のように一貫して口を開かないで頑張り通すことがどんなに大変なことか。

Ⅵ　瀕死の床にあって

一九三五年五月、古川は瀕死の状態で豊多摩刑務所から仮釈放されました。妹の庸子さんは、この時の模様を「前年の暮には面会所まであるいてくるほど元気になりましたが、年がかわってから結核がわるくなり、四月にはもうだめなことがはっきりわかって、五月にはまた保釈になりました。兄はふたたび生きて出ることは予想していなかったと見えて、わたしどもがその日むかえにゆくと、タンカにのって出てきましたが、何のことか見当がつかずにキョトンとした顔をしていましたが、わたしどもを見てはじめてわかったようでした」と語っています　こうして古川は、高砂の自宅にもどされ、渡辺宗治医師と看護婦たちの手厚い診療をうけ、山本宣治の従兄の安田徳太郎もかけつけたのですが腸結核で回復の見込がないと診断がくだされたのです。野呂の場合もそうであったように、特高警察や検察当局は、このままいけば確実に死に至ることの見極めがついてから、病院にかつぎこんだり、仮釈放するという見え透いたごまかしをして社会の指弾から逃れようとしました。古川苞もその典型でした。

庸子さんは、前出の『新しい世界』一月号に寄せた「兄のおもいで」の最後を「兄は死ぬ日までよく勉強し、よく闘病しました」と結んでいます。古川は、最後まで革命運動の前途に希望をもちつづけ、もう起き上がることさえできない身体で井上氏から贈られた書見台に『資本論』を載せて学習していたのです。

仮釈放の高砂の自宅は、特高警察に四六時中見張られていました。その目をぬすんで、病状

を聞き伝えた同志たちが次つぎに激励におとずれました。一九三五（昭和十）年、暮れも押し迫った十二月十五日午前十一時三三分、古川苞は父、姉妹らに見守られながら二九年の生涯を閉じました。

葬　送　彼が人民運動に献身しはじめて九年間、この間、四たび検挙、投獄をうけながら、三たびそこから脱出し、東京東部の人民の中に立ち戻るという驚異的活動に見られるように、どんなに生きたかったことか、そして再びこの地平に立ち上がって人民運動に献身したかったことか。彼の死を伝え聞いた同志たちがぞくぞくとかけつけました。そして葬儀が営まれました。しかし、参列者のことごとくが特高警察に検束され、葬儀委員長の岩田喜一郎氏はそのまま留置場に放り込まれ、その後十カ月間も拘留されたのです。

埋　葬　しかも、古川は死してなお葬ることさえ拒否されたのです。当時、「アカ」「国賊」と指弾された古川の墓は周辺のどの寺も後難を恐れてか引き受け手がないというありさまでした。その時、関東大震災後に浅

理昌院・古川家墓所

草から移転してきた高砂・理昌院の先々代の英断により墓所が提供され、墓が建立されたのは、古川苞の死から八ヵ月後の一九三六年七月十六日、姉貞子さんの夫君鈴木武夫氏の尽力によってです。

母芳子さんは、息子の看病につくす途上で、苞より二カ月前に、また父松柏さんは苞の死後心労がつづき半年後に相次いで亡くなりました。墓石には三人の戒名が刻まれています。鈴木武夫氏は職業軍人でありながら、苞の博識でユーモアもあり真面目な態度に好感をもち古川が訪ねていくと部屋に招き入れて話しあったといいます。この人あって古川家の墓建立が実現したのです。その墓石に刻まれた戒名は観光院雪道苞英居士。

Ⅶ　いまふたたび―新資料発掘に寄せて

一　剥がされた一枚の写真

古川家の葛飾高砂の自宅の位置の特定はまだすすんでいません。葛飾区の京成線高砂駅の南側だったという程度の情報でした。

古川苞を生涯の師と仰いで尊敬し戦前・戦後を生きた伊藤憲一氏が市ケ谷刑務所を出所したのは古川の死の一ヶ月後でした。戦前、古川からうけた影響をもっとも忠実に生かして活動し何度も投獄された一人です。古川の葬送には間に合わなかったが出所後、葛飾・高砂に遺族をたずねたのであろう、一枚の写真を入手していました。

戦後、日本共産党衆議院議員、大田区選出の都議会議員、区議会議員として活動した伊藤氏は古川について随所で書き残しています。その著書の中で「わたしの家に、党が壊滅する寸前の袴田中央部を守ってたたかった古川苞先生の死んだときの写真がある」と書いています。これを手がかりにご遺族の協力で妻の伊藤ミヨさんが所持していた戦前の写真アルバムが発見されましたが、残念ながらその写真は剥がされた形跡のまま行方不明となっていました。各方面への照会を試みましたが残念ながら「発見」にいたりませんでした。

しかしその写真に附されていたキャプションから古川の自宅の位置関係が浮かびあがってきました。伊藤のキャプションには、「余が帰来を待たず南葛奥戸村なる父君の家に病死す。君

の一生は聖人のそれに似たり」とあります。「余の帰来を待たず」とは、古川の死が伊藤の市ケ谷刑務所出所一カ月前のことだったからです。ここに注目すべきは「南葛奥戸村」です。当時の奥戸村は、「元上下小松、奥戸新田、奥戸畑田、曲金、鎌田新田、上一色、諏訪野など幾多に分かれ、おりしも明治二二年町制施行に当たり、これらを合併して奥戸村となり、昭和五年、町となる」のです。古川が両親と共に葛飾に移り住んだのは、一九二九（昭和四）年秋頃でしたから「奥戸村」の時代だったのです（裏表紙掲載の当時の地図参照）。

従って古川の自宅は京成高砂駅南側の奥戸地域と接しているあたりであったと思われます。この記述はご遺族の京成高砂駅より南側ではなかったかと云う記憶にも一致するものです。戦前、古川の片腕となってその活動を支援しつづけた井上熛（さかり）氏が戦後、次男保世氏をともない自転車で高砂・新宿地域を捜してあるいたことが浮かびあがりましたが、それは記憶をたどって古川の墓所を捜していた可能性があります。妻の井上りうさんは、古川の死の直前に見舞っており、自宅の場所を間違えることはなかったと思われます。

二　「エミールを読め！」―獄中書簡「はがき」の発見

二〇〇六年三月十五日開催の「古川苞没後七〇周年を偲ぶつどい」は主催者側とご遺族との劇的な邂逅の場となりました。会場で遺族を代表して挨拶された古川の甥にあたる鈴木彬（ひとし）氏は、古川が獄中から姉貞子さん（彬氏の母）へ出した「手紙」の存在にふれました。

その後この手紙の発見に尽力され、同年十二月十六日の墓参会後の「偲ぶ会」（於高砂・常

願寺）でこの手紙（はがき）を公開されました。古川の生誕一〇〇年を飾るにふさわしい発見・公開となりました。手紙（写真参照）は墨痕鮮やかに達筆で書かれており、彼がすぐれたガリ版筆耕のベテランであったという伊藤憲一氏の証言を裏づけるものとなっています。

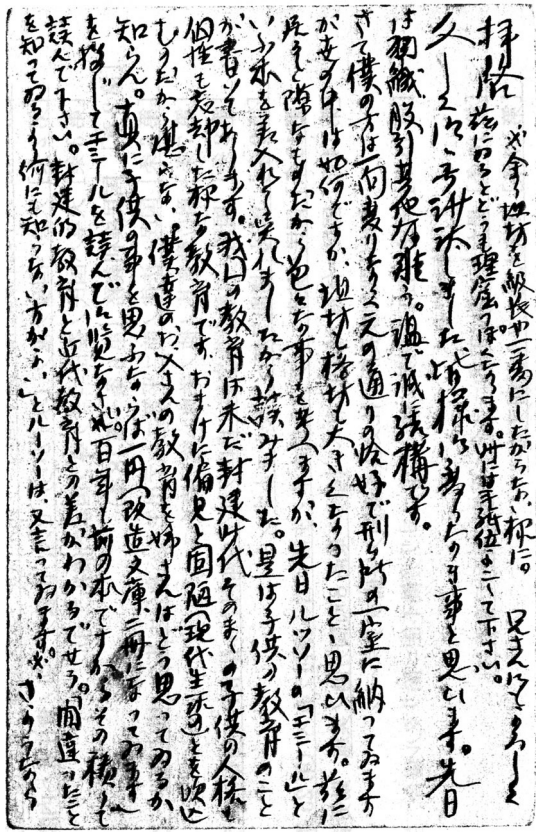
「級長や一番を望むな」　はがきは冒頭、衣類の差し入れの礼状で始まり「僕の方は元の通りの格好で刑務所の一室に納まっています」と書き、ついでルソーの『エミール』を読んでの感想を述べ、書ききれなくて冒頭にもどって「拝啓」の下に、息子の坦坊（本名坦一九二一～一九五一、彬氏の長兄）を「余り級長や一番にしたがらない様に」と結んでいます。また、同じく氏名のでてくる格坊（本名格一九二八～一九七〇）は彬氏の次兄です。鈴木彬氏の名前もすべて古川の父の松柏さんの命名によるものです。漢学に素養のあった松柏さんならではの命名と云えましょう。

さて、古川がこの「級長」という言葉を書き入れたとき、彼に去来したものは『エミール』の教育論に照らして

発見された古川苞の姉宛の手紙

みて、自分の息子（苞）に級長や一番を期待した父親の教育が果たして良かったかどうか、ということを言外に言いたかったのでしょう。

古川の人生観　私は、この最後の締めくくりの文言に古川の人生観がよく出ているように思います。古川には最高学府まですすみエリートになる道が開けていました。しかし彼は自らの学んだ真理を立身出世の具につかわず労働者・人民の幸福のために献身する道へ歩をすすめました。そこに彼の真骨頂があります。彼は人間の真価は勉強ができるかどうかでは決まらないということを言外に云いたかったと思います。その根底には、自分が白金小学校（東京・港区）と山形中学で級長に選ばれ、そしてその後山形高校、東京帝大へというエリートコースを歩みながら、自分が学んだ学問、真理を社会変革運動の実践に生かしていくという当時最も困難で「地獄の門」をくぐる決意なしにはできない道を敢然と選択して悔いることなき生き方への誇りがありましょう。



手紙の文面

この「はがき」はちょうど教育基本法改悪法案が自・公勢力の暴挙で通過した翌日（二〇〇六年十二月十六日）の『朝日新聞』「天声人語」欄に『エミール』の教育論が登場し、奇しくもその同じ日に、古川の獄中「はがき」が公開され、彼が七〇数年も前に獄中でこの『エミール』を取り上げ、わが国の教育のあり方を論じた警世の卓見はこんにちにも通ずるものです。「封建時代そのままの子供の人格と個性を忘却した様な教育」では「偏見と固陋（ころう）」に固まった人間をつくってしまう」〔固陋＝心や見識が狭いの意―藤田〕と。彼のこの警告は、そのまま今日の教育基本法改悪論者への痛烈な「贈り物」となったのです。

楽天性　同時に皆さんもこの手紙を読み、そこには獄中の厳しさ辛さにみじんもふれていないことに気づきましょう。獄外の家族に心配をかけまいとする古川の優しい家族思いと革命的楽天性を示すものといえましょう。

［研究余話］

発信日の特定　この「はがき」の発信地は豊多摩刑務所（今日の中野区上高田）です。発信日は「十一月十七日」と書かれています。問題は何年の十一月なのか。

古川が豊多摩刑務所に収監されていたのは、一九三〇～三一年（「二月事件」多喜二と同時期）、三四年夏期以降～三五年五月迄の二回です。消印が不鮮明で年の特定が出来ませんが、文面から総合的に判断して一九三四（昭和九）年のことと思われます。

発信先、検閲は　宛先は姉貞子さん、住所「府下岩淵町」は現在の東京都北区志茂町です。この手紙には「検閲印」が見られません。古川がはがきをしたためたのが十一月十七日です

が、消印は「11・30」と判読されます。この間が刑務所当局の検閲期間と思われます。獄吏は「ルソー」やその著書『エミール』をよく知らなかったため「発信可」としたか、あるいは特別に問題視する内容ではないと判断した可能性があります。当時は、証拠隠滅のおそれありとして未決囚の手紙内容制限が厳しく行われていました。古川のように既決囚の場合は逆に検閲が弱かったことも考えられます。

しかし、当時、豊多摩刑務所の書信室では、ガラスペンにインクをつけて書くのが一般的であるのに対して、この手紙が筆で書かれていること、検閲印のないことなど、別のケース、つまり、古川が獄中で獄吏や雑役囚からも尊敬をもって遇されていたことから、あるいは獄吏の手を経て獄外に持ち出されて投函されたことも考えられます。なお、当時、豊多摩刑務所では治安維持法違反の収監者の手紙は発信・来信共に獄吏が密かに筆写して記録に残していた（『獄中の昭和史』参照）ことから、その筆写リストを点検しましたが古川のものは記載がありませんでした。

三　「この人を見よ」―名声を求めなかったその生き方

古川苞の略歴を見れば、小・中学生時代から古川が抜群の学力と転校した先々でクラスメイトや先生の信望を集めて級長に推されたこと、父君の薫陶を受けながらも自らの刻苦の努力によって博識と教養を身につけていったことは歴然です。

その古川の生涯は、主に三つに分けて見ることができます。

①転校の連続の少年時代―行く先々のクラスで際立った存在
②新しい社会思潮に目覚めマルクス主義に接近した旧制中学・高校時代
③社会変革運動への献身―東京帝大新人会、セツルメント時代から共産党員時代

私はこれまで古川の生涯をたどってくる中で、彼自身が才気活発、クラスで人気者の少年時代から博識な知識をひけらかさず不言不語、黙々と地味なまるで地べたを這うような活動家に変身する姿に驚いています。そこに私は、天皇絶対の支配構造・治安維持法下の困難な時代に名声を求めず地味な活動と献身に徹した古川の生き様をみる思いです。

「この人を見よ」 戦前の「時局新聞」[*6]に古川の活動についての長文の紹介記事があるという教示を近代史研究家の犬丸義一先生からいただきました。しかも先生はそのオリジナルも所蔵しておられ該当号の提供をうけました。

古川苞の紹介記事は一九三五年七月の一一四／一一五号「或るオルグの記録―この人を見よ！」と題する「野溝宗二」名の投稿記事です。

その内容は、主人公「竹下徹夫」が不眠不休のオルグ活動で職場の労働者を励ましていく様、困難に押し潰される職場活動家を何度も訪ね激励する姿が描かれていきます。

「時は昭和八年、九年の、日本労働者運動のどん底期であり、一切の階級的諸組織は壊滅さ

＊6 この「時局新聞」は、左派ジャーナリズムのタブロイド判週刊紙。一九三二年七月創刊、「赤旗」「無産者新聞」などが弾圧で発禁や配布ルートの断絶のため多くの活動家がこの「新聞」によって情報を仕入れていた。一九三六（昭和十一）年発禁処分を受け一六九号で停刊。

(8) 第一一四號 (日曜日) 時局新聞 週刊 (昭和四年)

或るオルグの記録

―「この人を見よ！」

市電「更生案」の前哨戦……

家にたゞ一人の働き手の彼が……

―幼い弟と病める母

成果を報告する心のたのしさ

「寒いな」とも云はず……

「或るオルグの記録―この人を見よ！」掲載の「時局新聞」114 号

週刊 時局新聞 (月曜日) 第一一五號 (3)

或るオルグの記録

「この人を見よ！」(前號から續き)

伊藤憲一氏は戦後「かれの行動は、そのころの同志に深い感銘をあたえた。同志宮本顕治の、どんなにひどい白色テロの拷問をうけても、ひとことも語らぬという党の伝統の先駆は、まさにかれであった」と述べている。紙面は「時局新聞」115 号

れつつあつた。……こういう時期に竹下は、捜されている体であることを隠して大衆の中へ入って行こうと精根の限りを尽くしていたのである。彼の全努力は黙々として集中した。大企業の中に働く労働者群の中に一人でも友人を見出そうとした。それはこの友人を通じて職場へ働きかけることではなく、むしろ運動方針を職場の人たちにたててもらおうとしていたのである。

この会合を自転車で東京中を走って組織するのはいつも竹下だった。しかし、竹下は皆を感服させるような意見をはいたことが殆どない。そして彼が古ぼけたネクタイを固く結んで無言でそこに座っているだけで集会の空気は緊張した。

彼は自分の輝かしい闘争経歴を固く秘していた。彼は自己に関しては一切語らなかった。彼の全身に充満しているものは、職場の中に仕事を進めて行こうとする一念のみ。

竹下がその一身をささげて援助しようとした諸工場の中からもいろいろな芽がボツボツ吹き出して来た。ニュースが発行され、真面目な労働者の小さい結集、メーデーへ前例を破った大量動員の型で……。そして一〇人の竹下、一〇〇人の竹下が生まれだしてくるだろう」(要約)。

投稿の最後は、「枕元に痰壷と尿瓶とを置いて、彼は屍のように寝ている。……見舞いに行ったら、彼は嗄れた低い声で貴方に職場情勢を尋ねるだろう。その他に彼は余り何も語らぬだろう」と結ばれています。

二回にわたる長文の投稿掲載の時期、この時古川は重篤状態で仮保釈され自宅で病臥中で再起が危ぶまれる状態であったことは前項でみました。投稿者は過去の古川の活動ぶりを実によく活写しており、古川と共に活動していた同志の一人だと思われます。

訃　報　「時局新聞」はその十二月二三日号に「古川苞氏遂に死す―『或るオルグの記録』

の主人公」と題する訃報記事を掲載します。「不言不語、新聞紙上でも『カキ男』の異名をとって、腸結核のため執行停止となり留置場から出され、貧しい父母の下で窮乏の療養生活をつづけていた古川苞氏は去る十六日〔十五日の誤記―藤田注〕遂に死亡。

十八日の葬儀にあたっては、告別式に列席せんと出かけたもの一〇人ばかりが検束され葬儀は家庭で親戚のみをもって寂しく行われた。氏は本紙一一四・一一五号（七月十五、二二日号）に連載されて読者の感激をそそった『或るオルグの記録』の実際の主人公であった」と。

ここには戦前のあの困難な時代に、古川が職場での活動を重視し、そこにたたかいの核心である活動家を創っていくという困難で地味な活動に全力を傾けていくという一貫したスタイルがみられます。小林多喜二が一九三一年五月、野田律太と語らって亀戸事件の現場を訪ねたあと『転形期の人々』『党生活者』『地区の人々』で亀戸事件で犠牲となった南葛労働運動の活動家とその運動に着目して作品化したように、古川もまた南葛労働運動の優れた継承者の一人であったということができ、その活動スタイルはこんにちの時代閉塞下の労働運動・民主的運動への重要な示唆を与えてくれているものです。「時局新聞」に掲載された古川の活動の姿は、井上保世氏（井上熛（さかり）氏次男）が少年時代に自分の家に集まってくる全協（階級的な伝統をもつ評議会が弾圧で解散させられたあと一九二八年十二月に結成された日本労働組全国協議会）や中澤計七らの組織した純労働者組合の活動家たちの中によれよれの服をきた労働者風の古川がいたことと符号が合うものです。そしてそれらの活動家たちが東京東部の工場に入っていって活動を開始していたこととも。この活動の蓄積があったからこそ多くの活動家たちが戦後いち早く各工場に入って労働組合を結成する運動に入っていくことができたのです。

四　青砥・亀有無産者診療所運動と古川

古川苞の真摯な人民への献身の活動を目の当たりにして、家族全員が古川のよき理解者、協力者になったことはⅣ章でふれました。妹の庸子さんは、消費組合運動に参加するようになり一九二九年春二回検挙され千葉、市ケ谷刑務所への拘留を経験しています。そして戦後も兄の生涯を尊敬の念をもって顕彰しました。父松柏さんは、息子の逮捕投獄の中で犠牲者救援運動に参加し、さらには無産者医療運動にも参画していくようになります。

当時、葛飾、東京東部地域は無産者医療運動でも品川・大崎地域とともに全国の先駆をなしていました。この地域の運動と古川父子との接点が明らかになりつつあります。とりわけ古川の治療に当たった亀有無産者診療所の渡辺宗治医師の活動ともあいまって先進的活動が根づいていました。

戦前の東京での無産者医療運動

一九二九年三月五日　山本宣治、神田光栄館で右翼暴漢に刺殺さる。

「山宣記念　労働者農民の病院をつくれ」解放運動犠牲者救援会アピール（『戦旗』二九年四月号）　それに応えて無産者診療所運動はじまる

①大崎無産者診療所　一九三〇年一月

②青砥無産者診療所　一九三〇年八月　古川苞の父松柏氏出資で完成、中島辰猪医師同愛病院から赴任

③亀有無産者診療所　一九三一年三月開設
一九三三年一月　渡辺宗治医師赴任、看護婦砂間あき、村田マリ大崎診療所から応援、次いで村田（若林）タケノ、宮内はる
一九三三年九月弾圧で閉鎖→渡辺宗治医師十一月、同所近くに渡辺医院開所して継承

④江東無産者診療所　一九三二年六月　七月弾圧で閉鎖

⑤城東診療所　一九三三年六月　十一月弾圧で閉鎖

⑥南葛無産者診療所　一九三四年三月　十月弾圧で閉鎖

（戦前最後の東京での無産者診療所）

青砥無産者診療所の設立（一九三〇年八月二十日）　青砥農民組合が弾圧で解散させられ多くの組合員が残りました。そこで地域活動の持続のために地域に診療所をつくろうという機運が盛り上がりました。それには労働者・農民の多い青砥地域（葛飾区）がよいということになりました。こうして建設資金を農民や組合員が五銭、十銭と出し合い、古川の父松柏氏が二〇〇円拠出して目標額を超えました。場所は葛飾区水道道路で高砂橋への道路十字路から中川土堤寄り左側一〇〇メートルくらい入った所の二階家。当初は夜間診療のみで藤原豊次郎医師が担当しました。

ついで中島辰猪医師が同愛記念病院から専任として赴任。大崎無産者診療所から砂間あき、村田マリ看護婦が応援に派遣されました。しかし青砥診療所は部屋も狭くベットもない状態のためもっと広い所をという要求が高まってきました。

亀有診療所の開設　こうして一九三一年三月、亀有無産者診療所が開設されました。場所は、東京市外亀有村亀有九八〇番地、亀有警察署の裏手で二階家に設立。一階は待合室、診察室、看護婦室。二階は八畳と六畳で青砥より三倍の広さになりました。診療所からは亀有警察留置場の鉄格子が見えました。農民組合、労働組合（日本紙業、東京合同労組、靴工組合）の代表で構成された管理委員会による運営となり、中島医師が赴任、浮塚小作争議、工場ストライキなどの医療班として出動するなどの活動に入りました。その後中島医師が千葉の北部無産者診療所へ移動したため医師不足となりこの時も大崎無産者診療所から医師の応援を得て持続させました。

こうした窮状を見かねた渡辺宗治医師が赴任、看護婦村田（若林）タケノ、宮内はるのメンバーで診療再開にこぎつけました。渡辺医師は上野・谷中から水本、奥戸・高砂、船橋海神付近まで往診をするなどの広範囲の医療活動を展開しました。

こうした中で一九三三（昭和八）年九月中旬、渡辺医師の

当時の亀有無産者診療所の所在地
（現・葛飾区亀有２丁目59）

往診中に看護婦、書記が総検束され、その弾圧により診療所閉鎖のやむなきに至りました。渡辺医師は「無産者の医療運動がこの地でまた必ずや芽をふくとおもい亀有に土着することをきめ」一一月診療所近くに渡辺医院を開院したのです。こうして一九三五年五月、古川の豊多摩刑務所での病状悪化の報に接し刑務所に駆けつけ診察します。そうして仮釈放で自宅に戻った古川を毎日のように診察に訪れ励まし、懸命な診療活動を行ないました。看護婦の村田タケノさんは亀有に産院を開業しながら診療所を手伝い、診療所閉鎖のあとも古川苞の看病を手伝いました。その後は宮内はるさんと交替し、はるさんがその最期を看取りました。宮内はるさんは古川の死後も父松柏さんの翌年の死去まで精魂込めて看病につとめられました。こうした献身的な診療・看護はこの地域での古川一家への信望の厚さのあらわれでした。

この無産者診療所運動は弾圧によって閉鎖のやむなきに至りましたが、この貴重な経験が戦後いち早く民主的医療活動―今日の全日本民主医療機関連合会とその傘下の院所の活動に生かされていったのです。古川の父君のこうした活動はその先駆的な活動の礎となったのです。

主権在民と反戦平和のために　古川苞も多喜二もその最後の瞬間まで侵略戦争に反対し反戦平和のためにたたかい、天皇絶対の専制支配をなくし主権在民の社会を、人民の生活と権利を守るために献身しその途上で斃れました。共に二九歳の若さでした。戦前治安維持法下の弾圧で虐殺され、獄死したものは一七〇〇人余、総検挙者は数十万人に及びました。共産党員、活動家だけではありません。やがてその弾圧の対象は、学者研究者、言論人、リベラリスト、宗教者などあらゆる階層に及びその対象は際限なく拡大されていきました。「横浜事件」はその

典型例です。こうして日本軍国主義は、天皇の名において治安維持法と特高警察によって日本人民を圧殺し、侵略戦争に突き進んでいったのです。日本軍国主義の敗北により、多喜二や古川苞らが戦前掲げてたたかった課題の多くは、平和憲法に結実していきました。いま、この侵略戦争のアジアの犠牲者二〇〇〇万人と全世界に再び侵略戦争を起こさないと誓った平和憲法をぶち壊そうというよこしまな勢力が頭をもたげています。作家の澤地久枝さんはこうした動きに対し自分は一ミリも引かない、と宣言しています。多喜二も古川も戦前の暗黒時代、一歩も引かず命を賭して支配勢力と対峙した先駆者です。

こんにち、私たちが対峙している支配層は世界トップクラスの独占資本、世界一級の軍事力をもち、それにアメリカがつっかい棒をかっているのです。つまり世界でも第一級の支配力をもっているのです。強大な対抗軸の形成なしにはわが国の社会進歩の事業は成功できません。自覚的民主勢力の責務は重大です。われわれもまた一歩も引かない。これが古川や多喜二のかかげた灯を継ぐことにつながるでしょう。

おわりに

二〇〇六年三月十五日、古川苞終焉の地葛飾区で「没後七十周年記念のつどい」が開かれました。この「偲ぶつどい」準備の過程で、理昌院様のお引き合わせにより古川苞のご遺族との邂逅が実現しました。苞の姉妹亡き後、墓所を守っていただき今日に至りました。ご遺族は古川の姉貞子さんの子息で甥にあたる鈴木彬、沖（のぼる）さん、妹庸子さんの子息深井雄一郎さんです。「つどい」当日会場参会者にご挨拶をいただきました。

実は山岸一章氏の著書では古川苞の墓所は無縁仏と記述されていました。そして古川の五十年忌にあたる一九八五年十二月十五日の命日に葛飾区高砂・理昌院の古川家墓前で、研究者の山岸一章氏の呼びかけで古川苞と共に活動したゆかりの人々、共産党葛飾地区委員会、国民救援会、民青同盟などから四十人が参加して墓前祭と懇談会が開かれました。その時以来、日本共産党葛飾地区委員会・治安維持法国賠同盟東京都本部と有志が毎年、祥月命日に墓前に献花して古川苞を追悼してきました。

二〇〇六年十二月十六日、理昌院において生誕一〇〇年を記念した「墓参会とつどい」がご遺族も含めて開催されました。こうした流れの中で古川苞についての関心が高まりその不屈の生涯を示す彼の事跡についての新たな資料が発掘されつつあります。

本年（二〇〇八年）十二月十五日の古川苞没後七三年墓前祭に当たりこれまで発表された諸論稿にその後の研究成果を反映させてこの小パンフを発行し墓前に捧げるものです。

西暦	和暦	歳	古川苞略年譜	社会状況
一八八九	明治二二			大日本帝国憲法発布（明治憲法）
一八九七	三〇			片山潜ら労働組合期成会・『労働世界』
一九〇〇	三三			治安警察法公布
一九〇一	三四			社会民主党結成（わが国初の社会主義政党）
一九〇三	三六			幸徳秋水、堺利彦ら平民社設立
一九〇四	三七			日露戦争始まる（日本出兵）
一九〇六	三九		**七月二八日　小樽で出生**（父松柏　母芳子の長男）	
一九〇七	四〇			足尾銅山闘争、明治期最高の労働争議　二四〇件
一九一〇	四三			「大逆事件」（幸徳秋水ら翌年死刑）
一九一一	四四			警視庁に特高警察設置　東京市電ストライキ
一九一四	大正　三	八		第一次世界大戦はじまる
一九一七	六	十一	父退職（宮崎県庁）上京　礫川小五年生→港区白金小へ	ロシア社会主義革命
一九一八	七	十二	同小六年生　一一月　山形師範付属小へ	米騒動全国に波及
一九一九	八	十三	山形中学入学	東大新人会結成
一九二〇	九	十四		普選運動高揚
一九二二	十一	十六		日本共産党創立
一九二三	十二	十七	旧制山形高校入学	共産青年同盟結成　関東大震災　亀戸事件
一九二四	十三	十八	高校内に山形社会思想研究会結成（亀井勝一郎らと）	学生社会科学連合会（学連）結成
一九二五	十四	十九	マルクス、エンゲルス、レーニンらの文献学習	治安維持法公布　男子普通選挙法公布　労働組合評議会結成
一九二六	昭和　一	二〇	東京帝大文学部社会学科入学、六月　新人会加入 東大セツルメント市民学校で講師活動	労農党結成　京大学連事件（治安維持法の国内での最初の適用）

一九二七	昭和 二	二・二一	労農党江東支部書記（本所・柳島）	共産党二七年テーゼ　山東出兵開始　対支非干渉同盟	
一九二八	三	三・二二	「赤旗」創刊号読者となる 第一回普選で　労農党・唐沢清八候補応援 三・一五事件で検挙（勾留二九日で釈放） 東京合同労組南葛支部書記（江戸川区小松川）	二・一「赤旗」創刊 二・二〇　第一回普選で労農党躍進 三・一五弾圧事件　検挙者一六〇〇人余	
一九二九	四	二・二三	二月入党　大学卒業 四・一六事件で検挙　拷問で心臓脚気悪化四〇日で釈放 両親等と共に葛飾区・高砂に住む 健康回復後共産党地下活動に入る（赤旗プリンター）	山本宣治、治安維持法に反対し、右翼暴漢に刺殺さる 四・一六弾圧事件　検挙者一〇〇〇人余 伊藤千代子松澤病院で死去　二四歳	
一九三〇	五	二・二四	二月事件で検挙（二・二三）　豊多摩刑務所へ収監 八月　青砥無産者診療所開設（父松柏基金拠出）	「二月事件」二～七月に一五〇〇人検挙　多喜二投獄	
一九三一	六	二・二五	三月　亀有無産者診療所開設	中国東北部に侵攻（満州事変）　各地で反戦デー	
一九三二	七	二・二六	豊多摩刑務所から市ケ谷刑務所に移監	共産党三二年テーゼ	
一九三三	八	二・七	刑務所内でハンスト、重病で仮釈放（四・八執行停止）　五月、自宅静養中地下活動へ　共産党東京市委員会再建活動／党中央委員会指導部を守る活動に従事　赤色救援会東京地方委員会組織部長　亀有無産者診療所弾圧で閉鎖→渡辺医院開設	小林多喜二築地署で虐殺さる　二九歳 野呂栄太郎、宮本顕治ら相次いで検挙	
一九三四	九	二・八	六・二九江東区大島で検挙　警察署で六〇日間ハンスト （新聞に「蜥男のハンスト」と報道さる） 豊多摩刑務所に収監	野呂栄太郎品川署の拷問で病状悪化、絶命　三三歳 高島満兎　特高警察の襲撃で重傷、死去　二四歳 高橋とみ子（伊藤千代子の後輩）仙台・中新田署で虐殺二四歳	
一九三五	一〇	二・九	刑務所内で腸結核を発病　五月重態に陥り仮釈放 最後まで再起の意志捨てず『資本論』学習 **十二月十五日　葛飾区高砂の自宅で死去**　葬儀弾圧	袴田里見検挙　共産党中央の統一的指導部を失う 田中サガヨ　獄中闘争の後　絶命　二四歳 飯島喜美　栃木刑務所で獄死　二四歳	
一九四八	二三		第一回解放運動無名戦士墓に合葬		
一九八五	六〇		没後五〇周年墓前祭と偲ぶつどい		
二〇〇六	平成十八		三月一五日、没後七〇周年記念集会　一二月一六日墓前祭		

［資料提供］鈴木彬、犬丸義一、井上保世、伊藤ミヨ（故伊藤憲一氏夫人、娘婿・猿田平夫）、花沢楓、増岡敏和、日本共産党中央委員会党史資料室
［執筆協力］藤田廣登　労働者教育協会理事・伊藤千代子の会事務局
［参考文献］山岸一章『新版　不屈の青春―戦前共産党員の群像』新日本出版社
［墓所所在地］理昌院　葛飾区高砂七丁目二四―二五　〇三―三六〇七―六二三一
最寄駅　京成線・高砂下車15分（墓所立ち寄りの場合は理昌院にその旨お申し出下さい）

お願い　本書の内容については、古川苞追悼実行委員会か藤田までご照会下さい。

葛飾區
省電・亀有駅
亀有無産者
診療所
渡辺医院
省電・金町駅
(現JR常磐線)
亀有警察署
青砥無産者診療所
理昌院
京成線・高砂駅
奥戸村
〔地図：昭和９年当時〕

［発行日］2008 年 12 月 15 日
［発行者］古川苞追悼実行委員会
日本共産党葛飾地区委員会
葛飾区立石 3-27-19　TEL.03-3697-2101
治安維持法国賠同盟東京都本部
千代田区神保町 1-14 古内ビル 2F　TEL.03-3291-6070
［執筆・編集］（財）全労連会館付属「産別会議記念・労働図書資料室」
〒 113-0034 文京区湯島 2-4-4 平和と労働センター・全労連会館
TEL.03-5842-5610　FAX.03-5842-5609
http://www.zenrouren-kaikan.jp/tosho/